

運命を切り開く力―脱出と解放の系譜―

小原 克博	同志社大学神学部教授 日本キリスト教団正教師
講師紹介〔こはら・かつひろ〕	〔研究テーマ〕 キリスト教思想・宗教倫理（科学と宗教、生命倫理、環境問題、戦争論）

同志社で学ばうということ

今年から同志社科目が始まり、私もその科目のひとつを春学期に京田辺キャンパスで担当しました。八十人ほどのクラスだったのですが、その授業を終えて思ったのは、やってよかったということです。同志社科目を担当しているというものの、私はこの分野の専門家ではありません。日本の近代史であるとか、新島や同志社の歴史研究をしているわけではありませんので、毎回の授業のために、かなり必死で勉強し、準備をしました。授業をする中で、建学の精神に関心をもたれる学生が意外と多いことに気づかされました。受講された学生の中には、同志社を第一希望として入ってきた人もいれば、本当は別の大学に行きたいと思いつながら、不本意ながら同志社に入学したという学生もいました。今日、大学選びは偏差値に頼ることが多いわけですが、大学の価値は偏差値だけで計れるものではないでしょう。とりわけ同志社の場合には、偏差値では計れない付加価値が多分にあると思います。そういうことを新島の生涯や同志社の歴史を説明する中で語っていくと、入学のきっかけはどうであれ、やはり自分は同志社に来てよかった、と感想を記してくれる学生さんが少なからず出てきました。自分のアイデンティティーを形成していくためにも、自分自身が属している大学の歴史やルーツを学ぶのが大事であることを、繰り返し感じさせられました。

十名前後の学生が卒業していたころの同志社と、五〇〇名くらいの卒業生がいた頃の同志社と、五〇〇名もの卒業生がいる現在の同志社の間には、学生の質に関して、当然大きな差があります。五〇〇名全員が同志社スピリットを体現していくというのは不可能に近いことですが、たとえその一部でも、同志社の深い精神性に触れてほしいと思います。ただし、そのような精神を伝えていくために、同志社科目や同志社スピリット・ウィークだけでは明らかに限界があります。おそらく教職員一人ひとりが同志社の精神を担い、学生に影響を与えていくという地道な道を行くしかないのでしょうけれど、それもまた簡単なことではありません。

授業の準備のためとはいえ、新島襄の生涯を学び直していくと、そのおもしろさに心躍らされる瞬間が毎週のようにありました。一昔前に経験した新島との新鮮な出会いが、久々によみがえってきたような気がしました。今から十年近く前だと思いますが、新島遺品庫の目録を、学生と一緒にデータベース化したことがあります。それを社史資料室に提供しましたので、現在の社史資料のデジタル・アーカイブにも多少貢献していると思います。もちろん当時の技術ですから、スキャナーにしてもカメラにしても精度は劣っていたのですが、新島襄が書いた手紙や聖書などを遺品庫から持ってきて写真撮影したり、スキャンしたりしたのは、よい思い出になっています。新島が使った聖書の一頁一頁をめくりながら、いろいろな書き込み目に目を引かれました。新島が死ぬまで愛用した、汗ばみ、汚れが付いたその聖書をめくりながら、新島が私たちに何を伝えようとしたのか、その時以来、意識して考えてきたように思います。

新島にとっての「壁」

さて今日の本題に入っていきたいと思います。「運命を切り開く力―脱出と解放の系譜―」というタイトルを挙げましたが、主に新島の前半生、アメリカへ行った直後くらいまでのことについてお話ししたいと思っています。先ほど新島の聖書に触れましたが、彼は自分自身の生涯を振り返る時に、聖書のパースペクティブから整理しているところがあります。その意味では、聖書との重ね合わせの中で初めて見えてくる新島襄のライフ・ヒストリーが多分にあると思うのです。それが副題にあげた「脱出と解放の系譜」ということの意味です。系譜というのは、様々な関連性の中で事柄を語っていく、そのようなプロセスのつながりのことですが、新島の生涯を語るとき、聖書的なモチーフを意識することにより、より深く理解できる部分があるのではないかと考えています。

まずは、幼年期・青年期の新島についてです。新島は江戸の安中藩邸内で二十一歳まで暮らしました。江戸は当時の日本の中心地であったとはいえ、安中藩邸というのは非常に限られた空間であり、新島は其中で少年時代の大半を過ごしました。外に出ることはできませんでした、基本的には、壁に囲われた生活であったということが出来ます。その場合、「壁」にはいくつか意味があると思います。一つは空間的・物理的な「壁」です。安中藩邸を取り囲む壁があり、また、日本が鎖国をしていたという意味で、日本を取り囲む見えない「壁」が存在していました。

また物理的な壁や鎖国という壁だけでなく、彼が生きていた社会全体が持っていた「見えない壁」もありました。時代的な制約と言ってもよいのですが、封建的な社会秩序が厳然と存在していました。新島も、藩主の命令に従って奉公しなければならなかった。彼がそれをどのように受け止めたのかについては後に紹介します。新島は空間的な制約としての「壁」を越えたいと考えていただけでなく、伝統的な日本の社会秩序の中で従順に生きることを潔しとはしませんでした。したがって、そのような「壁」や制約にぶつかるたびに悩み、それを何とか越えようとした若き日の新島の素朴な心情の発露といったものが、後の手紙で記されています。そのようなことを踏まえた上で、壁や宿命を乗り越えるとは、どういうことであったのかを考えていきたいと思います。

封建的な社会に生まれ落ちれば、自分の藩主の命の下で定められた道を行かざるを得ません。それは運命のようなものです。それを引き受けていくということが、武士としての潔さであり、また当時の大人に求められた生き方であったわけです。そのような運命を越えていくような気概を新島は若いときにすでに持っていました。結局、彼の生涯は、数々の壁を乗り越え「自由」を求めた生涯であったと言えます。新島は常々「私は自由の愛好者である」と語りましたが、その言葉に含まれた自由の重みは、私たちが今日漠然と享受している自由とは、大きく異なるものだと思います。では、新島にとって自由とは何であったのでしょうか。そのことについても、あわせて考えていきたいと思います。

新島の脱国

新島が何を考えたのかということをお手紙に従って見ていきましょう。配布した資料は『現代語で読む新島襄』（丸善）からコピーしたものです。これは、新島を知る上で一番わかりやすい本のひとつだと思います。同志社女子大学は、これを新入生全員に配っているとのこと。ところが同志社大学は、いつの頃からか、新島関連のこの手の文献を配布することをやめてしまいました。かつて『新島襄書簡集』や聖書などを、新入生全員に配っていた時代もあったのですが、徐々に品数が減ってきて、今ではこれに類するものはまったく配っていないと思います。入学時に配る資料がどんどん多くなってきたために、新島関係の配布物が閉め出されていったと聞いていますが、残念なことです。いずれにせよ、『現代語で読む新島襄』では、それぞれの手紙に関する簡潔な説明がついていますし、何より現代語で書かれていて親しみやすいので、同志社関係者にはぜひ一読をお薦めしたい本です。

さて、新島はなぜ国禁を犯して脱国したのでしょうか。お配りした「私はなぜ日本を脱国したのか」（脱国の理由書）は、もともと英文で書かれています。これは一八六五年に新島がボストンに到着した直後、ハーディー夫妻に宛てて書かれた手紙です。新島は英語を本格的に勉強し始めてからまだ二年くらいしか経っていませんでしたから、手紙の英文は決して流暢なものではありませんでした。しかし、シンプルな表現でもって、彼の熱い情熱を語っています。結果的にこの手紙が、ハーディー夫妻の心を大きく揺り動かし、日本から来た見ず知らずの青年を自分たちの養子として受け入れていく決意をハーディー夫妻はします。この手紙は、新島が国禁を犯して脱国し、ボストンまでやって来たいきさつを記していますが、そうした出来事の前提となる、新島の若い頃の様子、当時の日本の状況、新島が安中藩邸でどのような勤めについていたのか、またどのようなトラブルがあったのか、といったことも語られています。これらのエピソードの内、ポイントになることをいくつか紹介して、新島の人柄、青年期の様子、彼が抱いた志などについて考えていきたいと思います。

手紙の最初の方では、新島が日本で何を学んでいたのかが記されています。新島は幼い頃から日本の古典、漢籍、中国文学に親しんでいたことがわかります。彼の父親・新島民治は、祐筆という書記官のような務めをしており、同時に書道の先生でもありました。新島もそのような環境の中で書道のたしなみを身に付けていきます。ところで、新島の人生に大きな転換点を与える書物との出会いがありました。手紙では「ある日、友人がアメリカ合衆国の地図書〔『連邦志略』〕を貸してくれた」とあります。この『連邦志略』とは、後に新島が宣教師として派遣されていくアメリカン・ボードの宣教師ブリッジマンが書いたものです。もちろん当時の新島は、自分が将来この本の著者と同じ宣教団体に属することになるとは夢にも思わなかったでしょう。いずれにせよ、新島はこの本を読んで「脳みそが頭からとろけ出そうになるほど驚嘆した」と記しています。この本に書かれていたことは、新島にとって相当ショッキングなものでした。アメリカでは国民が選挙で大統領を選ぶとが、当時の日本では想像できなかったような制度が実施されていることを知ると、脳みそがとろけ出るほどの驚きを新島は体験します。『連邦志略』だけではなく『ロビンソン・クルーソー物語』なども、新島に大きな影響を与えていくのですが、このような書物との出会いが、新島の目をアメリカへと向けさせる最初のきっかけになったと言えます。

新島は勉強がしたくて執務室に留まることができず、時々逃げ出しています。「十日後に私は再び逃げ出したが、藩主には気づかれなかった。しかし、残念にもその次に逃げ出した時には見つかってしまい殴られた」と記されています。見つかったのは殴られの繰り返しだったようですが、殴られても懲りずに新島は勉強のために外に出て行きます。彼が何を学んだのかをざっと見ていきますと、オランダ語を学んだということが記されています。当時は英語圏の学問より蘭学、つまり、オランダ語を中心とした学問の方がはるかに幅を利かせていたもので、オランダ語は、漢文の次に習う、いわば第二外国語のようなものでありました。さらに算術や航海術を学んだことも記されています。航海術の中には数学や天文学など、今の言葉でいう自然科学系の学問がたくさん含まれていたもので、新島は日本にいた頃から、非常に幅広く学問に接していたことがわかります。このことはアメリカにおける新島の学びにも非常に大きく影響しており、アメリカで彼がより積極的に学んだのは、主として自然科学系の学問でした。特に新島は地質学に関心を持っていました。彼は宣教師として帰国

しますし、また専門的な神学教育を受けていますが、神学にはあまり関心を持っていなかったようです。彼の後の手紙の中で、当時のアメリカの神学の状況について触れているようなものはほとんどありません。新島は当時の神学論争の細部に関心を示すというよりは、むしろ外に出かけて発掘調査をすることを好みました。

新島と聖書

このように好奇心旺盛な新島が、ある日、さらに別の本と出会います。「ある日友人を訪ねると、彼の書斎で聖書を抜粋した小冊子を見つけた」。アジア圏のどこの国でもそうでしたが、聖書全体を翻訳することは難しかったので、まずトラクトと呼ばれる小冊子が作られていました。聖書の重要な箇所を抜粋し、まとめたようなものです。新島は続けて次のように書いています。「あるアメリカの宣教師が漢文で書いたもので、聖書の中のもっとも重要な出来事だけが記してあった。私はそれを彼から借り、夜に読んでみた。なぜなら聖書を読んでいることが知れると、幕府は私の家族全員を磔にするので、私は野蛮な国のおきてを恐れていたからだ」。「磔にする」というのは少々大げさな言い回しですが、公然と聖書を読むことが、はばかれていた時代であったことは確かです。キリシタン禁制の高札がまだ立っていた時代です。読むことが禁じられていただけに、いっそう新島的好奇心がくすぶられたとも考えられます。非常に断片的なものとはいえ、聖書と出会い、新島は次のように自問自答しています。「誰が私を創ったのか。両親か。いや、神だ。私の机を作ったのは誰か。大工か。いや、神は地上に木を育てられた。神は大工に私の机を作らせられたが、その机は現実にとどこかの木からできたものだ。そうであるなら私は神に感謝し、神を信じ、神に対して正直にならなくてはならない」。これが当時の新島が持っていた、創造者なる神に対する理解でした。

両親や家族に対する未練を残しながらも、新島は紆余曲折の末、快風丸という船に乗って、何とか函館までたどり着きます。そこであらためて、アメリカで学んでみたいと思いを強くし、国外脱出を具体的に考え始めます。さすがの新島も、最初はかなりためらっています。「しかし、私はためらった。祖父や両親を悲しませるだろう、との思いがあったからだ。その思いがしばらくの間私の心を捉えた。けれどもやがて別の考えが頭にひらめいた。それは、私は両親から生まれ育てられたが、本当は私は天の父のものである。それゆえ私は天の父を信じ、その父に感謝し、そしてその父の道を進まなくてはならない、という考えである。こうして私は日本から連れ出してくれる船を探し始めた」。このようにして彼は脱国を決意し、上海まではベルリン号、上海からボストンまではワイルド・ローヴァー号に乗って、一路アメリカを目指すことになります。

新島だから、これくらいのことを書いて当たり前だと思われかもしれませんが、しかしよく考えてみると、ここまで信仰に根ざして確信的に書けるというのはある意味驚くべきことです。なぜなら、当時の新島が持っていた聖書の知識は、きわめて限られたものであったからです。彼は渡航中に聖書を手にして読むことにはなりますが、誰かが特別に手ほどきしてくれたわけではありません。しかし、アメリカ到着直後の新島が、すでにキリスト教信仰の核心部分を把握し、それをういて自分自身の歩んできた道のりを振り返っているわけです。新島がアメリカまでやってきたのが、単に若者特有の好奇心や冒険心によるのではなく、父なる神への信頼のゆえに、ためらいの気持ちを克服し、脱国してきたのだということが手紙では明確に語られています。この点は新島を知る上で非常に重要な点だと思います。

ところが、ようやく新島がたどり着いたアメリカは、決してよい状況にはありませんでした。手紙に記されているように「南北戦争以後、物価があがったので、陸の上ではおまえに救いの手を差し伸べてくれる者など一人もいないぞ」という冷たい言葉を、ボストンの港で新島は聞くことになります。彼が到着した頃は、南北戦争が終わったばかりで、国内経済は疲弊し、アメリカ人ですら職を失い、十分な生活ができないような状況でした。新島はアメリカでは身を寄せるところがなく、船を下りたとしても、最悪の場合、ボストンの路上で野垂れ死にすることも可能性としてあったわけです。

しかし新島はこのような非常に難しい状況の中で、彼の半生を振り返った手紙をハーディー夫妻に記すことによって、自分自身が進むべき道を切り開いていきます。ハーディー夫妻との出会い、そして夫妻の援助がなければ、新島はアメリカで生活することはできませんでした、ましてやアメリカで高度な教育を受けることもできませんでした。当時のアメリカは今と異なり、大学に行けるのは、ごくひと握りの人たちでした。フィリップス・アカデミーという名門校に新島は通うことになりますが、これもハーディーのバックアップなしにはあり得ない話です。新島が恵まれた環境の中で学んでいくことができたのは、まさにハーディーとの出会いのおかげです。それゆえ、この手紙の締めくくりの部分で、本心からの思いを次のように吐露しています。「それから私は船の持主であるハーディーさまが私を学校へ送り、経費を一切出してくださるかもしれないことを知った。船長からこのことを初めて聞かされた時、私の両眼は涙にあふれた。氏への感謝の気持ちが大きかっただけでなく、神は私をお見捨てにならない、と思ったからである」と。

手紙を通じて、新島の日本での生活を知り、なぜ彼がアメリカに来ようとしたのかが、神への信仰との関係で語られているのをハーディーが見たとき、彼はまったく見ず知らずのこの日本の青年を支えていこうと決心をすることになります。

リスクを負うということ

今、脱国の理由を新島の手紙に即して見てきました。それをさらに別の角度から解釈してみたいと思います。衝撃的な書物との出会い、そして「創造者なる神」との出会いの中で、新島は世界に対する見方を変えていきます。言い換えれば、安中藩邸や江戸や日本という枠組みの中で見ていた世界が、新しい出会いをきっかけに急速に相対化されていきます。世界は、自分が住んでいる身近な世界だけではなくて、自分が知らないところには、まったく違う世界が存在しているという事実に対し、目が開かれていきます。そして、それを知るや否や、その世界を求めざるを得ないのであり、その好奇心の炎を誰も消すことはできないような状況でした。

新島の生き方のもう一つの特徴は、リスクを負う、リスクに向き合う、ということです。今の時代は、できるだけリスクを負わないよう工夫することに頭を使い、またそれが求められます。なるべく自分が損な目に遭わないように先回りして考え、リスクを回避するのが、現代人のライフスタイルであると言ってもよいでしょう。

新島の場合、国禁を犯して脱国することが命に関わる大きなリスクであったことは言うまでもありません。密出国が見つかった場合、それは事と次第によっては死罪にもなる犯罪行為でありました。しかし、そのリスクの大きさを十分に認識した上で、自分が求めるもののために必要な道を選びとっていくような気概を、新島は若い頃から晩年に至るまで、一貫して持っていたと言えます。

同志社が一三〇年前にできた時にも、大きなリスクを負っていました。関西圏の中でも、宗教的には特に排他性の強い京都のほぼ中央に校舎を構えましたから、仏教界を中心に京都市民からの強い排撃運動に同志社はさらされました。京都に学校を作ることのリスクの高さについては、宣教師たちの間でも問題にされており、新島の同僚であった宣教師たちの間でも、否定的な意見が非常に強かったようです。神戸や大阪で学校設立が頓挫したという事情があるとはいえ、もう少し待ってでも、京都を避けて、アメリカン・ボードの拠点がある神戸や大阪で学校を作った方がうまくいくという声はたくさんありました。ところが新島はたまたま知り合った山本覚馬との出会いの中で、リスクの高い京都のただ中に同志社を創る決意をします。結果的に言えば、このリスクを冒して新島が京都に同志社を創ったということが、同志社を同志社たらしめていると言えます。神戸や大阪に学校が作られる可能性も十分にあったわけですが、もしそうなら、現在の同志社が持つ同志社らしさは、かなり違ったものになっていたに違いありません。私は、京都の伝統文化や伝統宗教の中で多くの軋轢やリスクを経験しながらも、そこで切磋琢磨されていったからこそ、同志社が同志社らしさを磨いていくことができたと考えています。

旧約聖書と「脱出」「解放」

次に、「脱出」「解放」という新島の生涯にとって重要なテーマを、聖書に関連付けて考えてみたいと思います。聖書において「脱出」や「解放」を考えると、真っ先に思い浮かぶのが、旧約聖書（ヘブライ語聖書）の「出エジプト記」に記されているエジプト脱出の物語です。モーセがエジプトで奴隷となっていたイスラエルの民を引き連れて、エジプトから脱出し、その後荒野を四十年さまよって、最終的には神が約束された乳と蜜の流れる地カナンへたどり着くという物語が、「出エジプト記」とそれに続く書物の中で記されています。「出エジプト記」二〇章二節は「モーセの十戒」の出だしにあたりますが、そこでは次のように記されています。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」と。このような形で、神が自己紹介をしています。「私は、あなたたちをエジプトから脱出させ、奴隷の状態から解放した存在なのだ」ということが端的に表現されています。イスラエルの歴史の中では、神とは「創造者なる神」であると同時に「解放者としての神」としての側面を持っています。そして、エジプトからの脱出物語は、ある意味「空間的な解放」であると言えます。

ところが聖書には、「空間的な解放」だけではなく「時間的な解放」も重要な意味を担っています。聖書の大切な伝統の一つに「安息日の遵守」というものがあります。安息日の遵守はユダヤ教に起源を持ちますが、キリスト教にもこの精神は形を変えて引き継がれています。安息日は「創世記」の創造物語に一つの根拠があります。神が第一日目から第六日目までの各段階で、人間の創造を含め、すべてを創造したことが記されています。そして、「第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なされた。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なされたので、第七の日を神は祝福し、聖別された」（「創世記」二章二―三節）とあります。この特別な日を安息日として守りなさいという戒めは、モーセの十戒にも記されています。

ユダヤ教の場合には、我々の曜日から言うと、金曜日の晩から土曜日にかけてが安息日にあたります。一口にユダヤ教徒といっても、信仰に対する厳格さには、かなりの幅があります。超正統派のユダヤ教徒がいるイスラエルなどに行くと、安息日規定の徹底ぶりにしばしば驚かされます。安息日は休むべき日ですから、原則的に労働が禁じられています。一つおもしろい例を紹介しましょう。イスラエルの建物に三つくらいのエレベーターがあるとすると、必ず一つは安息日専用のエレベーターになっています。エレベーターのボタンを押すことが労働だと考える超正統派のユダヤ教徒のために、その安息日専用のエレベーターが用意されています。そのエレベーターに乗れば、ボタンを押さなくても全部の階に止まってくれます。したがって、手でボタンを押す必要がないので、安息日の規定に抵触しないというわけです。こうした徹底ぶりは、私たちから見れば、もちろん極端に思えますが、ユダヤ教徒にとって「休む」ということがどれほど大きな意味を持っているかがよくわかると思います。

休むことについてのこのような考え方は、現代の日本人の考え方とは大きく隔たっていると言えるでしょう。日本では、休むことは悪徳として理解されるようなところがあります。ぼ一つとして何もしないことは、だらしないことと見なされ、休みながらでも、何かすることを求められます。もちろん、だらだら休むことと安息日を守ることとはまったく違います。聖書では、安息とは神の創造の業をおぼえ感謝することであり、また日常的な時間の繰り返しから解放され、自らの創造性を回復する時間でもあります。

空間的および時間的な解放をともなった脱出の物語を聖書は記しています。そして、この解放のモチーフが新島の生涯を語る上でも、大切な視点になります。神から約束された「新しいもの」を求めていくためには、今ある閉塞的な状況、先に取り上げた言葉で言えば「壁」を乗り越え、自らを解放していく必要があることを聖書は述べているからです。

新約聖書と「自由」

これまで旧約聖書に触れてきましたので、次は新約聖書の言葉を見ていきましょう。新約聖書の中にも、旧約聖書同様、「脱出」「解放」「自由」に関連する表現やモチーフはたくさんあります。同志社にとってもなじみのある有名な聖書の言葉に「ヨハネによる福音書」八章三二節があります。「あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にする」というイエスの言葉です。この言葉には、同志社教育の中で重視されてきた理念の一つが凝縮されています。学ぶこと、真理を知ることこそが、本当に人間を自由にするのだという精神です。そして、この精神は、新島が学んだアーモスト大学などのリベラル・アーツ・カレッジから同志社に受け継がれていくリベラル・アーツの伝統の中に息づいてきました。学ぶというのは単に知識を集積することではなく、学ぶことによって、私たちが今までもっていた既存の価値観や、自らを縛っているものの考えから自由になっていくという理解がそこにはあります。人間を真に自由にする、そのような学問のあり方をリベラル・アーツは追求しているとも言えるでしょう。この伝統を同志社は引き継いでいるはずなのです。

ところが現実の日本の教育は、必ずしもそのようなにはなっていません。勉強するというのは、自由を放棄すること、やりたいことを我慢する嫌なこととしてイメージされることの方が多いいのではないのでしょうか。学びが人を自由にするどころか、かえって束縛するものとして受け止められています。自分がよい成績を取って、よい学校に進学するためには、自由を犠牲にして勉強しなければならないと。その意味では、勉強して自由になるという感覚を義務教育の中で体得していくのは非常に難しい状況にあります。しかし本来学ぶというのは人を自由にすることであり、新島はまさにその快感や喜びに満たされたからこそ、さまざまなリスクを冒してアメリカへと渡ったのです。そして、アメリカにおける学びが彼をさらなる自由へと解放していくことになります。このような体験があったからこそ、日本に帰って大学を作ることを新島は強く志しました。学ぶということが人を自由にするのだという経験を学生の頃にできるかどうかは、その人の人生にとって決定的に重要な意味を持ちます。そのような学問による自由の経験を、今日の同志社が与えることができるのかどうかは、まさに同志社教育の根幹に関わることであると言ってよいでしょう。

さて「自由」に関してもう一点、新約聖書にある時間概念を考えてみましょう。新約聖書は「クロノス」と「カイロス」という時間を意味する二種類の言葉を持っており、それらを使い分けています。「クロノス」は時計やカレンダーで計ることのできる、客観的に刻まれていく時間を意味しています。それに対し、いわば「時が満ちていく」という感じで語られる時間を聖書は「カイロス」と呼んでいます。たとえば、何か熱中しているときには時間があっという間に経ってしまったり、嫌なことをしているときには逆に時間を長く感じる、といった具合に、私たちの時間感覚は、時間の持つ「意味」によって様々に変わります。カイロスの用例の代表的なものが「マルコによる福音書」一章一五節の「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」というイエスの言葉です。「時は満ち」の「時」に「カイロス」という言葉が用いられています。

人間には、すでに定められた社会の様々な仕組みの中で、あるいは与えられた運命の中で生きて行かざるを得ないという側面があります。しかし同時に、ある時、ある瞬間において、私たちは自分自身で選ばなければならない分岐点に出くわします。そして、行くべき道を自ら選び取っていくことによって、自分にとっての特別な時間が成就していくという体験をすることが本来できるはずなのです。単に要領よく生き、最短距離を目指すだけでは、本当に自分自身の時間を味わい、時を満たしていくことができるかどうか、はなはだ疑問に思えます。旧約聖書の中の「安息日」が、解放や自由と結びついた時間感覚を提供していたように、新約聖書における「カイロス」という時間概念も、私たちの生の充足を考える上で、重要な意味を持っています。その意味では、聖書で語られている解放の物語、自由を求める物語は、新島の生涯や同志社の歴史に接ぎ木され、今なお、その物語は継続していると言えます。

私たちにあって「壁」とは何か

これまでのことを踏まえた上で、最後に、私たちにあって「壁」とは何なのか、について考えてみたいと思います。日本に限ったことではありませんが、現代の社会は、ある意味「壁」がないと言うことができます。世界がグローバル化する中で、ボーダーレスという言葉に象徴されるように、既存の壁が取り壊されていっているような状況があります。確かに、一昔前の時代に比べれば、私たちは大いに自由を享受していると言うことができます。自由に海外に行くことができ、欲しい情報はインターネットですぐ手に入る現代は、新島が生きていた時代と比べれば、まさに隔世の感があります。

ところで、ここで問わなければならないのは、このような時代の中で私たちが享受している自由は、かつて新島が求めた自由をはるかに凌駕する価値を持っているのだろうか、ということです。あまりにも自由になりすぎたがゆえに、自由が、ある対価によって獲得されたものだという事実を、私たちは容易に忘れてしまいます。新島の場合、様々なリスクを冒し、そのような試練や困難と引き換えに、自由を一つひとつ体得していったというプロセスがあります。最初から与えられており、誰もが当たり前に持っているものに対し、特別な価値や意味を見出すというのは非常に難しいことです。ところが、このように有り余る自由を享受している一方で、私たちは壁を作ろうとする傾向を持ち続けています。ボーダーレス時代の中で、携帯電話やインターネットといった電子ツールは欠くことのできない存在となっていますが、それがかえって自分を中心にした見えない壁を作り上げ、自分と自分に親しい仲間だけを中心とした閉じられた空間の中で居心地よく生きること快感を感じていきます。電子ネットワークの問題は、新たな壁の一例に過ぎません。人種差別や文明の衝突など、壁の存在はなくなるどころか、ますます顕在化しているようにも思います。

ここで、私自身がどのような形で「壁」を経験してきたかについて少しお話ししておきたいと思います。一九八九年、ベルリンの壁が崩壊したとき、私はドイツに留学していました。今から振り返れば、歴史的な変化を身近に感じることでした、よい時期にドイツにいたと思います。壁の崩壊以前、何度か東ベルリンに行ったことがありますが、米ソの冷戦時代における東ドイツの存在感は、独特の畏怖を感じさせるものがありました。ベルリンの壁は、西の世界への脱出を試みた何百人という人々の命を奪ってきたのであり、その冷徹な存在感には有無を言わずな凄みがありました。当時の冷戦構造や米ソの対立は、核戦争の危機などとあわせて、一般市民がどうできるものでありませんでした。東西世界の間の「鉄のカーテン」は、押ししても引いても、とうてい動かしようがない重みを持っていたように思います。ところが私がドイツで経験したのは、東欧の様子がおかしくなってきて、何か変わってきたなと思っていた途端に、ベルリンの壁が崩れていったという歴史の劇的な変化です。私自身、その壁を崩しに行った一人ですが、ドイツ人たちと一緒にハンマーで壁を崩していく経験をすることで、いろいろなことを考えさせられました。壁そのものは非常に粗悪なコンクリートで作られており、ハンマーで叩けば、ぼろぼろと崩れています。しかし、そんな脆い壁が、何百人もの人の命を奪ってきた悲劇の象徴であったことを思いながら、同時に「世界は変わりうるのだ」ということを身をもって経験しました。変わらないと思っていた世界であっても変わりうるということ。巨大なシステムでさえ、「時」が来れば変わりうるのだということを実感した瞬間でもありました。

もう一つ「壁」の経験をお話しします。昨年イスラエルに行ってきました。国際的に悪名高い「分離壁」、すなわち、イスラエルとパレスチナ人たちの居住区を隔離する壁を見てきました。ベルリンの壁が崩壊して、壁を作ることの愚かさを人類は学んだはず。それにもかかわらず、イスラエルの地には巨大な壁が立っていました。ベルリンの壁が叩けば、ぼろぼろ崩れるような四メートルほどの高さのものであったのに対し、イスラエルの分離壁は高さが八メートルもあり、しかも普通のハンマーで殴ったくらいではびくともしないような強固なコンクリートで作られていました。もちろん、その壁が自爆攻撃などから安全を確保するために作られたと聞いていても、その壁を見るに及んで、人類の歴史の中で壁を作り、壊し、また作っていく愚かさが繰り返されていることを憂わざるを得ませんでした。

このような「壁」の経験をし、また新島の生涯を振り返る中で、現在の同志社にはどのような壁が存在しているのだろうか、新島だったらそれをどう越えていくのだろうか、と考えます。新島の時代から見れば、同志社は想像できないくらいに巨大な存在になりました。巨大なシステムの中にある見えない壁を見極め、それを越えていくのは、決して簡単なことではありません。しかし、私たちが建学の理念に立ち返っていこうと思うなら、このような課題を避けて通ることはできません。そして新島の精神が、私たちを「壁」の中に安住させない力として今なお働き続けていることを、同志社創立一三〇周年の節目にあって、いっそう強く感じさせられるのです。

二〇〇五年十一月十日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録